

〔病・虫害発生概況〕

〔虫 害〕

本年は各種作物を通じて、特に広い地域にわたり多発した害虫はなかった。むしろ昨年とは対照的に、秋季の異常低温が虫の発育や増殖を抑制した。

水 稲

ツマグロヨコバイは多くの地方で漸減しており、萎縮病もまた少なかった。このような傾向は昭和49年頃からで、特に第2回成虫から第3回成虫まで、すなわちウイルス病の伝播期に低密度である。この原因として、稚苗移植に伴い本田の耕起・代かきが従来より早く行われ、これが第1世代幼虫の死亡率を高めること、麦類や裏作物の増加による食草の減少、育苗箱施薬の広範な普及、育苗時の防除管理の徹底、などが挙げられる。

セジロウンカ・トビロウンカの初飛来は6月上旬で早く、その後2～3回飛来したが、全体として飛来量は少なく、加えて秋季の低温は増殖を抑制し、被害は極く軽微に終わった。一方、コブノメイガの飛来は各地でおそ

く、飛来量も少なかったが、鹿児島及び沖縄の二期作では局部的に多発したところもあった。カメムシ類の越冬量は比較的多かったが、秋季には低温のためか本田への侵入は意外に少なく、斑点米の発生も少なかった。

昭和49年頃から多発傾向のイネゾウムシは、ますます発生地域を拡大し平坦部まで拡がった。そのほか、フクオビコヤガは各地で散見されはじめ、また局部的には、イネホソクビハムシ(沖縄)、セスジツチイナゴ(鹿児島)などが多発した。以上のように、最近ではマイナー害虫の台頭が特徴であり、稚苗移植に伴う移植時期の早期化が原因と考えられる。また、ヒメトビウンカも漸増傾向で、今後麦類の増加に伴い病葉枯病が多くなるとと思われる。

最近、各地で心枯線虫病が多発し、これによる黒点米の発生が確認された(福岡・熊本)。カメムシ類による斑点米に加えて、新たに米の品質低下の問題が生じた。本病は最近多いばか苗病と同様に種子消毒の不徹底によるもので、種子更新も必要である。

野菜・畑作物

各種の野菜・畑作物を通じて、九州全域で発生が多かつ

昭和51年水稲主要病虫害の発生面積

(単位: ha)

病虫害名	福岡	佐賀	長崎	熊本	大分	宮崎	鹿児島	沖縄
(病害)								
葉いもち	56,886	23,000	16,000	23,000	36,263	25,332	30,805	768
穂・枝梗いもち	58,557	14,510	11,000	12,000	36,905	30,080	21,131	608
紋枯病	53,848	19,300	20,000	24,000	35,985	34,098	31,038	611
白葉枯病	14,185	7,300	2,000	10,000	4,288	10,318	9,111	160
稈枯細菌病	7,152	1,435	400	1,000	1,914	—	—	—
萎縮病	47,506	8,550	10,000	13,000	18,302	13,198	28,302	—
縞葉枯病	17,510	260	4,000	100	3,402	1,740	1,099	—
黄萎病	—	—	—	500	—	—	425	—
わい化病	1~2	8	—	—	—	—	1	—
ごま葉枯病	20,333	3,950	9,000	5,000	20,218	3,770	4,162	192
小粒菌核病	—	355	3,000	7,000	7,937	—	3,240	—
(虫害)								
ニカメイチュウ(第1世代)	613	7	2,700	7,500	13,222	677	1,845	} 42
ク(第2世代)	1,110	14	1,600	8,950	4,803	2,782	2,335	
セジロウンカ	27,976	7,400	21,000	17,500	19,116	28,567	3,108	151
トビロウンカ	38,450	22,500	17,000	18,200	10,816	15,899	14,737	184
ヒメトビウンカ	46,508	5,600	6,500	9,650	11,608	22,153	2,809	—
ツマグロヨコバイ	74,296	30,100	18,500	22,450	34,397	33,449	25,511	640
イネツトムシ	4,475	—	—	2,350	2,441	487	1,738	—
コブノメイガ	33,140	17,000	8,000	11,700	18,709	7,754	21,843	361
フタオビコヤガ	—	—	500	3,100	2,104	631	2,247	—
アワヨトウ	505	20	150	1,850	—	243	2,073	—
カメムシ類	5,860	485	7,900	10,250	6,548	4,792	3,851	92
総作付面積(計352,678)	77,400	48,300	26,800	71,500	45,843	34,992	46,440	1,403

宮崎・鹿児島は早期も含み、沖縄は一、二期作の合計を示す。

たのは土壤害虫である。ネキリムシ類(各種野菜・畑作物)、ウリハムシ(ウリ類)、ハムシ類(アブラナ科)、コガネムシ類(イチゴ・畑作物)、ネダニ(ネギ類)などが挙げられる。土壤害虫の多発は塩素剤の使用中止以降生じている現象で、年々発生が多く発生地域も拡大している。これは連作や適切な防除剤がないことが主因である。このほか、野菜ではハダニで薬剤感受性の低下がみられている。各地で春作ジャガイモにニジュウヤホシテントウが多かった。

侵入害虫のオンシツコナジラミは、本年新たに沖縄南部地区(2月)と長崎市(8月)で発生が確認された。侵入経路はいずれも他地域で購入した花き類に付着して持ち込まれたものであった。幸に発見が早く蔓延前に処置され終息した。

沖縄のサトウキビではアオドウガネが多発し、一部では収穫皆無となった。また、トノサマバッタは南北両大東島で、カンシャクシコメツキは昨年に続き南大東島と、さらに南部の諸島でも多発した。ウリミバエは久米島における撲滅実験事業で不妊雄虫の大量放飼(週400万頭)

が有効なことが確認された。今後は撲滅を目ざして、他の地域での事業計画が立てられており、成果が期待されている。

果 樹 ・ 茶

各地で全般的に発生が多目であったのはチャノキイロアザミウマ(カンキツ・ブドウ・チャ)、カミキリムシ類(カンキツ・ブドウ・クリ)、ハマキムシ類(カキ)、セミ(ナシ)、吸蛾類(ナシ・カンキツ)などであった。これらはいずれも近年増加傾向で、防除の困難性あるいは不徹底、廃園や管理不十分園による発生源の増加などが原因である。

クリタマバチは耐虫性品種の感受性化に伴って発生が増大し、発生地域も拡大している(大分・宮崎)。カンキツでは中九州を中心に果実汚染症が発生して品質低下を来しており、これの原因究明が急がれている。カンキツのヤノネカイガラムシやハダニ類は各地で少なく、また隔年に発生し昨年被害が大きかったカメムシ類は、本年は極く少なかった。

(九州農業試験場 環境第一部)

昭和51年 水稲主要病害虫の発生並びに防除面積

(単位:ha)

病 害 中 名	福 岡		佐 賀		長 崎		熊 本		大 分		宮 崎		鹿 児 島		沖 縄	
	発生面積	防除面積	発生面積	防除面積	発生面積	防除面積	発生面積	防除面積	発生面積	防除面積	発生面積	防除面積	発生面積	防除面積	発生面積	防除面積
(病 害)																
葉 い も ち	56,886	51,482	23,000	34,340	16,000	19,000	23,000	25,000	36,263	30,700	25,332	42,600	30,085	52,950	768	1,482
穂 ・ 枝 梗 い も ち	58,557	115,974	14,510	54,482	11,000	17,000	12,000	101,000	36,905	53,000	30,080	41,800	21,131	68,612	608	1,216
紋 枯 病	53,848	82,052	19,300	57,251	20,000	20,000	24,000	52,000	35,985	43,800	34,098	39,200	31,038	36,450	611	240
白 葉 枯 病	14,185	39,267	7,300	13,035	2,000	1,600	10,000	8,900	4,288	2,800	10,318	24,650	9,111	6,972	160	158
穂 枯 細 菌 病	7,152	—	1,435	—	400	—	1,000	—	1,914	—	—	—	—	—	—	—
縞 葉 枯 病	17,510	—	260	—	4,000	4,000	100	—	3,402	—	1,740	—	1,099	—	—	—
萎 縮 病	47,506	(ツマ) (グロ)	8,550	(ツマ) (グロ)	10,000	23,000	13,000	(ツマ) (グロ)	18,302	(ツマ) (グロ)	13,198	ツマグロ	28,302	(ツマ) (グロ)	—	—
黄 萎 病	—	—	—	—	—	—	500	—	—	—	—	—	425	(ツマ) (グロ)	—	—
わ い 化 病	1~2	—	8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—
ご ま 葉 枯 病	20,333	(穂いもち)	3,950	(種子消毒)	9,000	(穂いもち)	5,000	—	20,218	(穂いもち)	3,770	1,000	4,162	—	192	90
小 粒 菌 核 病	—	—	355	—	3,000	1,200	7,000	(穂いもち)	7,937	—	—	—	3,240	—	—	—
心 枯 線 虫 病	611	—	25	—	—	—	2,100	—	20,164	—	2,304	7,500	13,454	500	—	—
(虫 害)																
ニカメイチュウ(第1世代)	613	(ツマグロ)	7	17,657	2,700	6,000	7,500	12,000	13,222	16,000	677	15,500	1,845	4,220	—	—
(第2世代)	1,110	(穂いもち)	14	34,207	1,600	4,000	8,950	10,000	4,803	11,500	2,782	14,000	2,335	2,200	42	1,053
セジロウンカ	27,976	(ツマグロ)	7,400	—	21,000	21,000	17,500	25,000	19,116	19,000	28,567	2,500	3,108	20,450	151	1,555
トビイロウンカ	38,450	(穂いもち)	22,500	—	17,000	32,000	18,200	60,000	10,816	23,000	15,899	25,900	14,737	48,760	184	1,553
ヒメトビウンカ	46,508	—	5,600	—	6,500	(セジロ)	9,650	12,000	11,608	—	22,153	—	2,809	270	—	—
ツマグロヨコバイ	74,296	118,528	30,100	52,722	18,500	9,200	22,450	83,000	34,397	22,300	33,449	73,300	25,511	40,870	640	—
イネツトムシ	4,475	—	—	707	—	—	2,350	—	2,441	40	487	—	1,738	—	—	1,530
コブノメイガ	33,140	(紋枯)	17,000	52,016	8,000	27,400	11,700	42,000	18,709	15,400	7,754	—	21,843	56,660	361	1,690
フタオビコヤガ	—	—	—	—	500	—	3,100	—	2,104	10	631	—	2,247	—	—	—
アワヨトウシ	505	—	20	—	150	—	1,850	—	—	—	243	—	2,073	—	—	—
イネゾウムシ	870	—	460	1,500	3,000	3,000	9,200	12,000	—	—	—	—	235	—	—	—
カメムシ類	5,860	(穂いもち)	485	3,826	7,900	14,200	10,250	16,000	6,548	8,920	4,792	33,000	3,851	3,400	92	1,530
総付面積(計 352,678)	77,400	—	48,300	—	26,800	—	71,500	—	45,843	—	44,562	223,430	49,240	237,200	一期 990、二期 453	—

(注) 防除面積は延面積を示す。()内は同時防除の病害虫名(略記)。

〔 病 害 〕

本年は8月下旬より気温が低目で、9月上旬の台風通過後も低温が持続したため、山間や高冷地の晩生種は登熟不良で青立ちが目立った。気温の低い山間地あるいは平坦部でも収かく期にかけて穂首、枝梗いもちが平年以上に多発し、冬期低温でムギ黒節病が中部九州以北に多発した。野菜類では急性いちょう症などの土壌病害が多発し、カンキツそうか病、黒点病が展葉期から落葉期の低温、多雨により多発し、赤衣病の多発も懸念される。サトウキビ黒穂病は一部地域では発生は停滞気味であるが、依然として南西諸島ではまん延状態にある。

稲・麦 病 害

早植栽培では苗代期間が低温のため苗立枯が多発した(佐賀)。葉いもちが全般的に移植直前から発生し、とくに山間や平地の一部でずり込み症状がみられた。7月下旬から8月上旬にかけて急激に増加した。本年は日本晴やレイホウ、ツクシバレが目立った。穂いもちは10月上旬から急増し、とくに枝梗いもちの発生が多かった。紋枯病は8月までは平年並で、その後9月の低温で上位葉鞘への進展は抑えられた。白葉枯病は初期のフェージ量はすくなく、後期の発生は9月の台風17号後であり、全般的には平年並であった。わい化類似病が2期作水稻で沖縄県八重山地域でみられ、品種はトヨニシキで注目された。もみ枯細菌病は出穂期の少雨とその後の低温に

より少発であった。穂枯れが宮崎の山間地帯で乳熟期以降から急増し、主として褐色葉枯病と条葉枯病であった。ムギ黒節病が3月上旬から4月上旬にかけて福岡、佐賀、熊本に急増した。赤かび病は平年に比べて多発した。登熟期以降の降雨期間が長かったことによる。さび病は全般的に発生がすくなくかった。

野 菜 病 害

キュウリの灰色かび病、菌核病が施設栽培で多発し、白いぼ系に多い。トップジンM、ベンレートに耐性菌が多い。菌核病がビニールマルチをしていないほ場に多い傾向にある(佐賀)。近年土壌病害としてスイカ急性いちょう症(ユウガオ台)、イチゴ急性いちょう症、トマト急性いちょう症(根腐いちょう)の多発がとくに本年の特色である。レタス *psedomonas* 菌の腐敗症の発生が多かった。

果 樹 病 害

カンキツそうか病、黒点病、かいよう病の発生が多かった。その他ナシ赤星病、ブドウベと病が多発の傾向にあった。赤衣病、果頂部褐変症などの防除対策未確立の病害の発生が目立った。

特 用 作 物 病 害

サトウキビ黒穂病は精力的な抜取りによって発生程度は軽減しつつあるが、南西諸島では南、北大東島を除いて依然として警戒すべきである。その他本年はサトウキビ葉焼病が奄美で多発した。

(九州農業試験場 環境第一部)